

## 斎藤茂吉の生涯 — 誕生から中学校時代まで —

小 倉 真 理 子

### はじめに

斎藤茂吉に関する評伝は今までいくつか出版されている。しかし、それは新資料の発掘に重点を置くものや、作品の背景説明として書かれている場合が多いように思われる。本稿も茂吉の生涯を見通すことを目的としているが、特に目指しているのは、外部的事実をもととして茂吉の内面的生活、つまり、精神史を探ることである。茂吉の場合、歌と実際の生活とは切っても切り離せない関係にある。茂吉の精神史を知ることは、茂吉という魅力ある人物の真の姿を明らかにすることであり、ひいては茂吉歌の理解を広げ深めるのにも大きな助けとなるはずである。茂吉に関しての膨大な資料を整理し、茂吉の精神史が浮き彫りになるような形でまとめながら見解を加えていきたいと思う。

なお、紙面の都合から、今回は、茂吉の誕生から中学校時代までを扱うこととする。

### 一、山形県金瓶村

在、山形県上山市金瓶かみやまし きんび）で農業を営む守谷伝右衛門（熊次郎）と、いくの三男として生まれた。守谷茂吉の誕生である。茂吉はこの金瓶で、数え年十五歳になるまでの幼少年期を過ごすわけだが、金瓶村での生活は概ね平穏で恵まれていたといってよいだろう。

その理由の一つには守谷家の経済的な安定が挙げられる。茂吉の実弟高橋四郎兵衛によると、当時の金瓶は「戸数八十ばかり、柱時計は斎藤十右衛門方に一つだけ、学校に八角時計一つ、畠のある家は村の半分、多くは床にもみぬか（もみがら）を敷きその上に席を敷いた」生活であったという。その中で、守谷家は、自作農地一町八反、年貢米百俵以内を納める小地主。養蚕も手広く行い、「常備の男が三人もある大百姓」であつたとも言われている。こうした経済的基盤の強さは、守谷家隣の宝泉寺が本堂を再建する時に高額な寄付をした記録からも推察することができる。茂吉は、守谷家の安定した生活基盤の中で誕生してきた男児であったといえる。

### 2、守谷家の人々と親族

守谷家の系譜 茂吉が生まれた時の守谷家は、曾祖母ちん、祖父伝右衛門（伝吉）、祖母ひで、父熊次郎 母いく、長兄広吉、次兄富太郎と茂吉の七名であった。広吉は明治七年二月生まれで茂吉より八歳の年長、富太郎は明治九年十月生まれで茂吉より五歳年長ということになる。その後、長女松（明治十八年六月生、同年七月没）、四男直吉（明治二十年七月生、のち高橋四郎兵衛）、次女直（明治二十四年一月、のち斎藤十右衛門家に嫁す）が生ま

### 1、守谷茂吉の誕生

明治十五（一八八二）年五月十四日、茂吉は、山形県南村山郡金瓶村かなかわ（現

れた。

なお、母方の守谷家と父方の金沢家とは縁戚関係が複雑に入り組んでいる。茂吉の母いくは、子供のいない守谷伝吉とひでのもとに養嗣子として入ったわけであるが、同時にいくと伝吉とは異父兄妹であった。また、いくに入嫁した茂吉の父熊次郎は、ひでの実弟に当たる。つまり、伝吉、ひでは、戸籍上の祖父母ではあるが、実質的には茂吉の伯父、伯母という関係にあり、戸籍上の曾祖母ちんは母いくの実母、茂吉の祖母に当たっている。

こうした入り組んだ関係は、茂吉が後に養子として入る斎藤家との間にも認められる。茂吉は後に斎藤紀一の長女てる子の婿養子となるが、紀一の父

斎藤三郎右衛門（豊太郎）は茂吉の祖父（実は伯父）伝吉と従兄弟の関係となっている。すなわち、上山で有力と考えられる守谷家、金沢家、斎藤家は血縁の上からも密接に結びついていたわけである。上山は、単に茂吉の父母が住んでいる場というだけでなく、茂吉の血族の故郷であったことがわかる。経済的な安定に加え、このように血族がしっかりと根をおろした環境の中で、茂吉はのびのびと自らの資質をいくことができたと考えられよう。

茂吉の父母と祖母 父守谷伝右衛門（熊次郎）については、父の死後（大正十二年八月二十九日没、七十四歳）、その思い出が書かれた『念珠集』に詳しい。

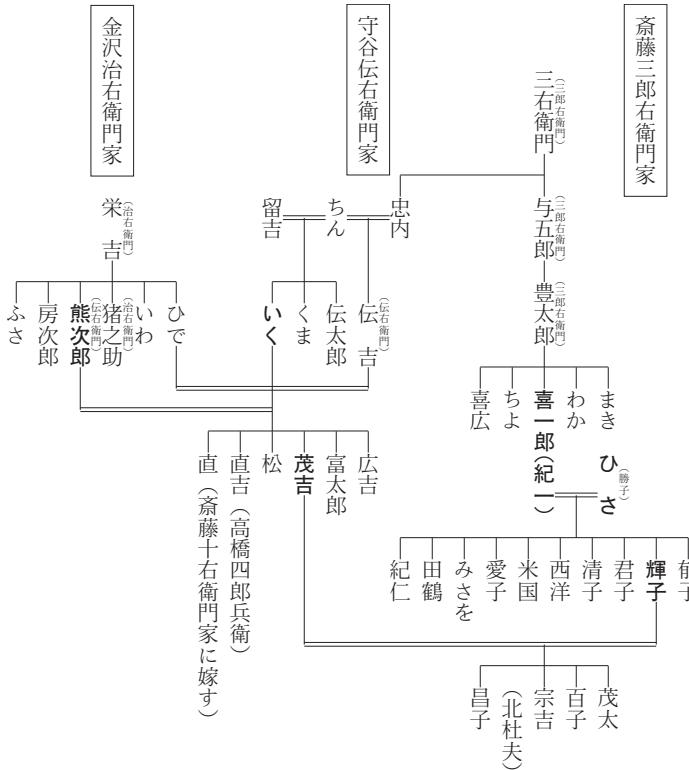
父は若いころ、田植をどりというのを習つてその女形になつたり、堀田の陣屋があつた時に、農兵になつて砲術を習つたり、おいとこ。しよがいな。三さがり。おばこ。木挽ぶし。何でもうたふし。祖父以来進歩党時代からの国会議員に力瘤いれて、薩室応和尚から草稿をかいでもらつて政治演説をしたり、剣術に凝り、植木に凝り、和讃に凝り、念佛に凝り、また穀断、塩頓などをもした。

右のように何事にも器用で、体格的には「小男で痩せた父」は、自分とは「あまり似寄の無いことに気付く」とも述べられている。

一方、母いくは、十八貫（約67kg）という大柄な体格で口もろくに利けない所があったという。また、いくの気圧や湿度に過敏な体质などは、茂吉に受け継がれたと指摘されている。父母の資質と茂吉の資質との関係は一概に論ずることはできないけれども、茂吉自身による次の見解あたり、平凡ではあるが妥当な線を示しているといえよう。

父と母の両方よいことも悪いところも貰つてゐます。只今は酒は飲めなくなりましたが、私の酒好は母系の祖父などの遺伝でしせう。母は旅もしたがらず、芝居なども強ひて見ようとしませんでしたが、父の方はなかなかの旅行好きでした。私は西洋に行つてても懐郷病などにならぬのは父の方の種子でせう。

いずれにしても、茂吉が平凡にして最良の愛を受けて生育したであろうことは間違いない。もちろん、茂吉を慈み育てたのは父母ばかりではなく、家族であり、後ろだてとしての血族であり、それらが在る金瓶の自然という



ことになるだろう。だが、そうしたものの中で、父母の愛が故郷の象徴としての位置にいたということは確かである。父熊次郎の死に接して茂吉は先に述べたように『念珠集』を草し、母いくの死に接しては「死にたまふ母」五十九首（『赤光』）を詠んだ。この「死にたまふ母」は、「家に居るときには終日忙しく働く」（『念珠集』）という誠実な農婦であった母を茂吉がこよなく愛した証とも言えるだろう。そして、これは歌人としての茂吉の運命を決定付けるものとなつたのである。

さらに、茂吉は父母ばかりでなく、家族や血族に対しても愛情のこもった姿勢で論じ、かつ歌っている。祖母ひでの死に際しても、「冬の山」「こがらし」「道の霜」（『あらたま』）の四十八首が詠まれていていることを忘れる事はできない。父母同様、祖母ひでも茂吉にとって大切な存在だったのである。このように、茂吉は金瓶の人々の中で大切に育てられていたことが推し量られる。

**文学的雰囲気** 茂吉の父母は文学と直接は縁のない農夫であり農婦であった。しかし、茂吉の周りに文学的、文化的雰囲気がなかったわけではない。まず、父方の祖父金沢治右衛門（采吉・茂吉の父熊次郎の実父）は文寿堂、まきく或いはまきく垣と号する地方歌人であったことが挙げられる。治右衛門は明治十九年十月、茂吉が四歳の時に死去しているから、直接的交流は多くなかつたであろう。だが、茂吉の生家から道を隔てた向かい側にある金瓶本陣跡には、湯殿山を讃えた治右衛門の歌碑が立てられている。茂吉は幼い頃から「幾千里阿字の光のかがやきてふみまとはすな恋の山道」という祖父治右衛門の歌碑を目にして幼少年期の日々を過ごしたことになる。また、治右衛門の長男猪之助（のち治右衛門・茂吉の父熊次郎の兄）も短歌を詠む人物であつた。

一方、母方の祖父守谷伝右衛門（伝吉）の覚帳には「俳諧連歌か何かを記入したもの」（『念珠集』）があつたといふ。茂吉が次兄である富太郎に宛てた手紙の中で、「ゆるし給へ失せし祖父よ、抱かれて百人一首を誦せし我はも」と詠んでいるように、祖父伝右衛門（伝吉）は幼い茂吉に百人一首を教えるということもあったようである。これら血族の作品は、いずれも、文学的価値という観点から云々できるものではないだろう。が、文学的雰囲気の

中で短歌を志向する傾向が茂吉の周辺に在つたことは茂吉にとって大きな意味があつたと考えらよう。なぜならば、茂吉が文学に向かった時、他の文学形式には殆ど興味を示さず、一途に短歌へと進むことになつたからである。斎藤三郎右衛門と凧絵 先にも述べたように、斎藤三郎右衛門（豊太郎）は、茂吉の母方の祖父（実は伯父）伝吉と従兄弟の関係にある。斎藤三郎右衛門（豊太郎）にとって、茂吉は、従兄弟の孫（実は従兄弟の義妹の子）ということになる。複雑な関係ではあるが、血縁関係のある親類であることに間違はない。しかも、守谷家と斎藤家は同じ金瓶にあつたので、両家の交流は深かつた。

この三郎右衛門（豊太郎）は、多芸であり、柳月と号して絵や俳諧、菊作りに長じていた。茂吉はその三郎右衛門（豊太郎）から凧の絵を習い、十歳頃からは毎年正月に凧の絵を村の子供に売って、その金で本や雑誌を買うことにしていたという。本を買うという実際的な目的があつたとはいえ、茂吉の周辺にいる親戚筋にこのような文化的教養と特技を持った人物が居たことも注意してよいことなのではなかろうか。地方の一農村ではあるけれども、文学を含めて文化的な事柄に対しても無関心でない環境の中で茂吉は育つたといえり。

### 3、小学校時代

**小学校とその時代** 明治二十一年四月、茂吉が満六歳の時に金瓶尋常小学校に入学した。金瓶尋常小学校は、茂吉の生家の隣、宝泉寺境内にあつた。宝泉寺は茂吉が幼い時から遊び場所として出入りしていた場所であったから、親しみやすい小学校であったに違いない。明治二十二年七月には金瓶を含む九ヶ村が合併し堀田村となつたため小学校も合併され、三年生の時からは一里程離れた堀田村半郷尋常小学校に通うということはあつたけれども、幼年期と同様茂吉の小学校時代も概ね平穏であったといえるだろう。「学校では成績が良く神童視された。特に習字がうまく、食事中でも人と話してゐる間でも、いつもしきりに空に文字を書いてゐた」というエピソードも残つている。なお、空に字を書く癖は後年まで続いたようで、茂吉の次男・北杜夫や、高校の友人前田多門（注）にも指摘がある。

明治二十五年には半郷尋常小学校を卒業し、同校の高等科へすすんだ。そ

の後、増改築の終了した上山尋常高等小学校の高等科に転校し、明治二十九年に卒業している。この間も、総大将となって村の子供たちと角力をとったり、戦ごっこをしたりと、活発にのびのびと過ごしている。茂吉には「僕は小さい時は腺病質でひよろひよろしてゐた」（『念珠集』）という認識があったようだが、高等科の頃には村の少年たちの中心的な存在となつて活動していたことがわかる。

ちょうどこの時期は、日清戦争に勝利し、日本全体が高揚している時であった。日清戦争に日本が突入したのは明治二十七（一八九四）年七月の黄海海戦で、茂吉が上山尋常高等科三年の時。近代化が遅れ、戦意も低い清国軍相手に日本は圧倒的な優位となり、翌明治二十八年に勝利を収めたのであった。日本の高揚した気運を一山村の少年である茂吉たちも身をもって感じ取り、戦ごっこのような遊びに興じていったのだと考えられる。

**佐原隆応和尚** 茂吉の生家の隣、境内に金瓶尋常小学校も有する宝泉寺の住職が佐原隆応であった。高橋四郎兵衛（茂吉の実弟）によれば「父は隆応和尚を絶対尊信し、宝泉寺の壇徒筆頭ですべての事を和尚の意見に従つて行つた。和尚の性格の規模は大きく、村民を感化して、何事でも和尚の一言で定められ、村民の服従も亦絶対であった」という。その中で、茂吉における感化も一通りではなかった。尋常小学校四年生頃からは、隆応和尚に習字を学び、中林梧竹の書に接するということもあった。さらに、隆応和尚のもとで『日本外史』を読破するということもしている。後年、茂吉は次のようない回憶をしている。

僕は高等小学校を卒業しようとしたころ、将来にいろいろの空想を有つてゐた。併し直ぐ中学校などには入学させては呉れなかつた。僕は小

学校のかへりに春も追々深くなつてゆく林中に寝ころんで、ひとつ絵かきの修行にでも出掛けようか、それとも宝泉寺の徒弟になつてしまはうか。或はここ的新道のところで百姓をしながら山蚕でも飼はうか。そんなことを思つて時を過ごすことが多かつた。

〔山蚕〕

将来像の一つとして、宝泉寺の徒弟になることを考えていたことが知られる。最も身近な遊び場である宝泉寺隆応和尚の感化はごく自然に、また深く茂吉に染み込んで、精神的支柱の一つとなつたことを伺わせる。明治四十

年秋に、隆応和尚が上山を離れて、滋賀県にある時宗大本山蓮華寺に入山した後も、茂吉は三度もはるばると隆応和尚を訪れてゐる。そのうちの一回は脳溢血のために半身不随になつた和尚を訪れたもので、『ともしび』に「近江蓮華寺行」十一首として残されている。その折の歌「茂吉に何かうまきもの食はしめと言ひたまふ和尚のこゑぞきこゆる」からは二人の親しい間柄が伝わってくる。

なお、「山蚕」にある絵かきの修行をするという空想は、斎藤三郎右衛門（豊太郎）に風絵を習つたこと（前掲）によるであろう。また、野生の山蚕を飼うことは、祖父伝右衛門（伝吉・詳細前掲）の蔵書の中に佐伯義門著「山蚕養法」の小冊子を見たためであることが同じ「山蚕」で述べられている。佐原隆応和尚、斎藤三郎右衛門、祖父伝右衛門、共に幼少年期の茂吉に大きな影響を与えた人物であると知られる。幼少年期の茂吉の周囲にこのような人々がいて、茂吉を可愛がつていたことは茂吉にとって幸福なことであつた。

#### 4、上京

**斎藤紀一** 斎藤紀一は、茂吉の養父となつた人で、茂吉に風絵を教えた斎藤三郎右衛門（豊太郎）の長男に当たる。「三筋町界隈」には次のような記述がある。

養父紀一先生はそのころ紀一郎と云つたが、紀一といふ文字は非常によいものだと漢学の出来る患家の一人が云つたとかで紀一と改めたのである。父の開業してゐた、その浅草医院は、大学の先生の見離した病人が本復したなどといふ例も幾つかあつて、父は浅草区内で流行医の一人になつていた。

このように東京浅草で成功を収めた紀一には、「余も段々老えんとす金も溜まりたらば何も望みながらむ只名譽の事の望みあり故に子等を教育して斎藤紀一郎の家より博士にても『人も出でたらば余も本望なり』という野心があつた。紀一の故郷の実父斎藤三郎右衛門（豊太郎）の元に通う優秀な少年、茂吉に興味を持ったことは想像に難くない。折りしも、紀一と妻ひさ（のち勝子）の間には未だ男子が生まれていなかつた。次に挙げる高橋四郎兵衛の言が、両家の事情を端的に示しているといえよう。

私の家は、（中略）村でも中位より一寸良い程の生活だつたが、それでも自力で子供を中学校に出すのは困難であつた。高等科二年から中学校へ進めたのに、兄は四年を卒業した。その時斎藤紀一が兄の出来のいいのに目をつけたのであつた。紀一が私の父に「茂吉を東京へつれて行つて学校へ入れて見る。もし出来がよかつたら養子にしてもいい。」と言つてゐるのを私は傍で聞いてゐた。

だいたい、農家において次男以下の男子が養子に出ることは当時、普通になされていたことである。現に、守谷家四男直吉も高橋家に入つて高橋四郎兵衛と名のつた。東京で学校へも入れるという紀一の申し出を守谷家が受けるのは順当なことだったといえるだろう。こうして、上山尋常小学校高等科卒業後の茂吉は、同校の補習科に通つて、東京の学校へ入るために備えたのである。

なお、藤岡武雄氏によつて、紀一と茂吉の父伝右衛門の仲介役を果たしたのが、佐原隆応和尚であることが明らかになつてゐる。振り返ると、紀一の実父は茂吉に凧絵を教えた斎藤三郎右衛門（豊太郎）であった。少年期の茂吉に影響を与えたこの二人は、結局、茂吉の将来をも決定付けていたことに改めて気付かされる。

### 十五歳の上京

私は数へどし十五のとき、郷里上ノ山の小学校を卒へ、陰曆の七月十七日<sup>(注23)</sup>つまり盆の十七日の午後一時ごろ父に連れられて家を出た。父は大正十二年に七十三歳で歿したから、逆算してみると明治二十九年にはまだ四十六歳のさかりである。併し父は若い時分ひどく働いたためもう腰が屈つてゐた。二人は徒步で山形あたりはまだ暁の暗いうちに過ぎ、それから関山越えをした。その朝山形を出はづれてから持つてゐた提灯を消したやうに憶えてゐる。

（「三筋町界隈」）

父に連れられ、このように数え年十五歳（満十四歳）の茂吉は郷里を後にした。東京の上野駅に着いては「世の中にこんな明るい夜が実際にあるものだらうかとおもつた」（「三筋町界隈」）とう感慨を懷き、郷里上山からみると別世界ともいえる場所に飛び込んで行つたのである。東京市浅草区東三筋町で斎藤紀一が經營する浅草医院もまた、その一つであった。上京時の驚き

は次のように語られている。

医院はまだ宵の口なので、大きなラムズが部屋に吊りさげられてあつて光は皎々と輝いてゐた。客間は八畳ぐらゐだが紅い毛氈などが敷いてあって万事が別な世界である。また、最中といふ菓子も毎日のやうに食ふことが出来る。（「三筋町界隈」）

## 二、中学・高校時代

### 1、浅草三筋町

上京当時の斎藤家 「多くの青年が地方から上京して開業医のところで雑役をしながら医学の勉強をする。若し都合がつけば当時唯一の便利な医学校と云つてもよかつた済生学舎に通つて就学する。それが出来なければ基礎医学だけは独学をしてその前期の試験に合格すれば、今度は代診といふ格になつて、実際患者の診察に従事しつつ、その済生学舎に通ふといふやうなわけで、兎に角勉強次第で早くも医者になれるし、たゞとう医者になりはぐつたといふのも出来てゐた」（「三筋町界隈」）という状況で、浅草三筋町の斎藤家には多くの青年が出入りしていた。特に紀一はこうした書生に対して寛容な対応をしていという。茂吉はこうした書生たちと共に医学を目指す一人となつたわけである。

ただ、養子にしてもいいと言われている茂吉が他の書生達と一線を画していたことは事実であろう。上京をもつて茂吉が斎藤家に入籍したわけではないが、上京後に編入した東京府開成尋常中学校（現、開成中学高校）では斎藤姓を名乗つてゐる。一方、茂吉と同じく養子待遇の書生に対しては次兄富太郎に「彼の書生は養子と云ふと雖も未だ姓を斎藤とせしにもあらず戸籍に入れしもあらず未だ何たるやを知らざるなり」と書き送り、自分の待遇との違いを語つてゐる。とはいゝ、茂吉がこの期をもつて斎藤家に入籍されなかつたことが、次第に茂吉の煩悶となつていくことは事実である。

斎藤医院・浅草医院・東都病院・帝国脳病院・青山脳病院 茂吉上京当時、紀一の浅草医院は以上のような状況であったが、紀一が最初に開業したのは埼玉県秩父郡大宮の斎藤医院であった。紀一は病院名を変えながら、着々と

その規模を拡張して行っている。茂吉の次男北杜夫は、祖父・紀一の医術について次のように述べている。

「紀一は、確かに口先がうまく、成り上がり者で貴族趣味の俗物ではあったが、臨床医としてはなかなかの腕前ではなかったか。患者の頭に聴診器をのせ、或いは耳に耳鼻鏡をつけて覗きこみ、「ああ、君の脳は腐っている。大丈夫、ぼくがちゃんと治してあげる」などと、<sup>(注25)</sup>言つたことも

事実だが、これも分裂病患者などにとって巧妙な口説療法の一つだと言えよう。<sup>(注26)</sup>

小説『楢家の人びと』でも使われて有名になったこのエピソードは後年のものであるけれども、紀一の患者への対応はわかりやすく、医院が繁栄していった理由も容易に想像することができる。こうして茂吉が上京する五年前には、東京で浅草医院を開業していたわけである。そして、この浅草医院も繁盛、手狭になつたために、本院の近く神田区和泉町に分院として東都病院を経営することになった。

ところで、茂吉が上京してから三年目、明治三十三年十一月に紀一はドイツに留学し、精神病を研究、明治三十五年十一月にはハレル大学を卒業してドクトル・メジチーネの学位を受けている。そして、帰国後には、浅草医院の分院であった東都病院を帝国脳病院に改名改築し、精神科病院としての基礎を作った。こうした中から、紀一は日本一の私立病院と言われた青山脳病院を設立していったのである。

食客としての茂吉 次兄富太郎宛書簡<sup>(注26)</sup>で、茂吉は養父紀一を父と呼び、養母ひさ（勝子）を母と呼んでいる。これは茂吉が斎藤家の一員として認められていたことを示すものと考えられる。「三筋町界隈」では「母は私を可愛がつて学校から帰るとかけ蕎麦を取つてくれた。もりかけが一錢二厘から一錢六厘になつた頃で大概は三つぐらゐは食つた」とあり、養母ひさとも円満な関係にあつたことがわかる。

けれども、親戚とはいえ、他人の家で生活することの気遣いは並々ではなかつたであろう。茂吉に次いで次兄富太郎が斎藤家に寄食し医学を目指していたにもかかわらず、折り合わなくなつて帰郷することとなつてしまつた。このことに関して茂吉は次のように述べている。

食客とは他人の家に居るなり。働きて其のかはりに食することを得て暮して行くなりされば仮令親類といふ名前あるにもせよ食客といふ取扱ひを受くる以上は斯くするは通例なり。（略）小生の経験によれば初めの中は出来るだけ手まめに働くからざるも働くフリさへするは信用を得る道なり小生等にても今こそ信用を得て我儘なれど初めは成るべく斯くなしたものなりき。<sup>(注27)</sup>

茂吉が食客として気遣いをしながら生活している様子が窺えよう。その上に初めての男子である西洋が生まれたことは、茂吉に少なからぬ煩悶を与えたといえる。茂吉の斎藤家への正式な入籍も遅れていたので、養嗣子としての位置を失うことになったからである。吉田幸助宛書簡<sup>(注28)</sup>には「小生の家にも一昨年男児生れぬ。世は、無常とかいへば未来は何だか分り申さず小生は今日では現金主義に候。恐くは余の未来は苦しまねばならぬ事が生ずるならむ。」とあり、西洋の出生によって、将来に不安を懐く茂吉の心情が語られている。結局、茂吉が正式に斎藤家に入籍したのは茂吉が二十三歳になった明治三十八年七月一日のことと、紀一の次女てる子（十歳）の婿養子としてであつた。

## 2、開成中学校時代

開成中学校 明治二十九年八月二十九日、上山から上京した茂吉は、同年九月十一日に東京府立開成尋常中学校一年次（二期）に編入学している。開成中学校はもと共立学校と称していたものだが、進学率の高さを誇る名門であつた。リットンの格言「The pen is mightier than the sword」にちなんだペンと剣の交叉した校章はよく知られており、尾崎行雄、芳賀矢一、正岡子規、江見水陰、島崎藤村など、文学に携わる人物のほか、多くの優れた人材を輩出している。その伝統は現在にも受け継がれているが、当時も第一高等学校への進学率が第一中学校と並んで高かつた。斎藤紀一の浅草医院に寄食し、医学の道を進むことが定められた茂吉が、進学に有利で、しかも浅草三筋町からも遠くない開成中学校（当時は神田淡路町にあった）に進学したのは自然なことだったと考えられる。

なお、開成中学校は、明治二十八年から三十四年まで、経営上の都合によつ

て東京府庁の管理に属していた。茂吉の入学はちょうど東京府立であった時代にあたっている。

**初期歌作の頃** 郷里山形を離れても、郷里の人々が多く出入りする斎藤家にあつては、山形弁で話す茂吉の言葉もさして不自然には響かなかつたである。しかし、東京出身の秀才が集まる開成中学にあつて、茂吉はまず、言葉使いによって特異な存在として印象付けられていたようである。

私が開成中学校に入学して、その時の漢文は日本外史であつたから、当てられる私は苦もなく読んで除ける。日本外史などは既に郷里で一とほり読んで來てゐるから、ほかの生徒が難渋してゐるのを見ると寧ろをかしいくらゐであつた。然るに私が日本外史読むと皆で一度に笑ふ。先生は磯部武者五郎といふ先生であつたがお腹をかかへて笑ふ。私は何のために笑はれるかちとも分からぬが、これは私の素読は抑揚のないモノトーンなものに加ふるに余り早過ぎて分からぬといふためであつた。

#### 〔三筋町界隈〕

こうした中、親しくなつた友人は、渡辺幸造（吃音）、市来崎憲一（鹿児島弁）など、多くは言語的にコンプレックスをもつ地方出身者同士であった。同級生の中には「桂蔭会」<sup>（桂陰会）</sup>と称して文学を華々しく論じた都会少年たちのグループがあつて、茂吉らに少なからぬ影響を与えていたことも確かである。茂吉は明治三十一年の夏休みに佐佐木信綱の『歌の栄』や、「山家集」「金槐集」の入った『日本歌学全書』などを買つてゐる。これは、「桂蔭会」のリーダー村岡典嗣が親類にあたる佐佐木信綱宅に入りして、開成中学の級友達に刺激をもたらしていたためと考えられる。そして、このような文学的刺激が、茂吉を歌作へと向かわせることとなつた。明治三十一年十月三十日付の書簡には茂吉が詠んだ歌として最初の二首が見られる。

兄上は雲か霞かはてしなき異域の野べになにをしつらん

此事も君の為めなり國のため異境の月も心照らさん

徵兵に応じて台灣守備隊に配属されていました次兄守谷富太郎に送つたものである。中学時代の茂吉は、富太郎宛に三十二首、友人渡辺幸造宛に一首、計三十三首の歌を詠んでおり、茂吉における最初期の歌となつた。習作とはいへ、これらの歌からは漢文調及び、万葉調に近い調子などを読み取ることが

できる。<sup>（注21）</sup>

このように歌作に心を向け始めていた茂吉ではあつたが、中学校で華々しく活躍する「桂蔭会」のグループには属さなかつた。中学で短歌や俳句を詠むにしても地方出身の渡辺幸造や市来崎憲一等と行動を共にしていたのである。中でも、詩歌に一日の長があつた級友幸造の感化は大きかつたといえる。茂吉は幸造（俳名・草堂）について次のように述べる。

渡辺草童君は中学校の同窓の友である。草童君は、中学に居る時分から、日本新聞の愛読者で、新しい俳人として、それから根岸派の歌の理解者として一家の見を有つていた。僕はある時、『僕は近ごろ歌を作りはじめた。そして根岸派の歌流である』といふような意味の手紙をやつた。さうすると草童君は非常に賛成して、そして僕の歌を批評し或るものは褒めて呉れた。ここではじめて僕は自分の指導者を得たやうな気持ちになつて、歌稿を送つて批評してもらふ。新刊のアシビを送つて分からぬところを説明してもらふといふ風であつた。草童君の指導によつて、僕の目は少しづつ開いてきた。（思出す事ども）

幸造は胃潰瘍のため、開成中学三年次には退学を余儀なくされたが、右にあるように、退学後も書簡によるやり取りが頻繁で、茂吉が伊藤左千夫に入門する前後の明治三十八年、三十九年（第一高等学校四年から東京帝國医科大学一年）はその頂点となつてゐる。中学の親友渡辺幸造は短歌における初めての指導者として茂吉の歌作に重要な役割を果たしたすことになったのである。

#### 露伴文学との出会い

このような中学生生活を送つてゐた茂吉が、内面から支えたものとして忘れないのが幸田露伴の文学である。茂吉は開成中学二年の頃から帰り道に「小川町どよりから、神保町どよりを経て、九段近くまでの古本屋をのぞくのが樂しみ」（「吳秀三先生」）で本を購入したり、神田小川町の「いろいろは貸本店」に出入りしていろいろの書物を借りたりしている。茂吉が手にした本の範囲はかなり広く、興味の赴くままにかなり雑多であつたといえる。その中には、後の恩師となる吳秀三著『精神啓微』も含まれてゐるという如くであつた。そして、このような幅広い読書の中で茂吉の心を捕らえた一つが、幸田露伴の著作だつたことになる。

そもそも、露伴との出会いは、斎藤紀一宅にいた書生によるものであったという。医学の書生の中に貸本屋の本ばかり読む者があつて、露伴の「露護精舍雑筆」との出会いもそうした中から得たものであることが、「三筋町界隈」で語られている。「露護精舍雑筆」については、「汝は是れ当成仏、我は是れ已成仏」と菩薩戒經に説かれたり。露伴は是当成仏、瞿曇は是已成…」以下の文章を挙げながら「私は少年にして此文を読み断えぬ感概を以て今に到つてはいる」(「露伴先生に関する私記」)と述べられている。「露護精舍雑筆」の一文は他でも引用されており、その心醉ぶりを伺うことができる。「三筋町界隈」には、また、次のような記載もある。

今からおもへば、少年にして読んだ露伴ものなどの影響があるに相違ない」(『斎藤茂吉集』巻末の記)と露伴との関わりについて触れている。  
米ピツ(いのひつ)に生れて死ぬる虫もあれど空(そら)に蚊(かづか)を食ふ蚊喰鳥(かづかひよ)かも(蝙蝠(かうもり))  
月おちてさ夜ほのぐらくいまだかも弥勒は出でず虫鳴けるかも(虫)  
というわけだから、「赤光」で用いられる語句に露伴文学の影響がしばしば見られることも必然であつた。なお、茂吉が幸田露伴と直接に会つ機会を得たのは、昭和九年十二月十四日、茂吉五十二歳の時であつた。

## 注

(注1) 「兄の少年時代其他」(アララギ) 昭和28・10)。

(注2) 黒江太郎『隆応和尚』(昭和33・11 山塊発行所)。

(注3) 宝泉寺に残る本堂再建寄付連名扁額。

(注4) (注1) に同じ。

(注5) 斎藤茂太『茂吉の体臭』(昭和39 年岩波書店)。

(注6) 「私は父母の何れに影響されているか」(昭和10・9 「文藝春秋」)。

(注7) (注1) に同じ。

(注8) 茂吉は、この伯父の九十二歳を祝つて「わが父の兄の治右衛門伯父こそは九十二歳の老に入りけれ」等五首(『寒雲』「雜歌控」)を詠んでいる。

(注9) 明治34年1月7日付。

(注10) (注11) (注1) に同じ。

(注12) 「二高時代の茂吉」(アララギ) 昭和28)。

(注13) (注1) に同じ。

(注14) 守谷茂吉が、金瓶軍本部となつて、遊び仲間の子供たちに与えた証書が残っている。

(注15) (注1) に同じ。

(注16) 一度は長崎から帰京する途中てる子を伴つての来訪であり、他の一度は最後は和尚の葬儀に出向いたものである。

(注17) 元々は喜一郎であったが、紀一郎と名のる時期もあった。

(注18) 守谷富太郎宛 明治32年5月31日付書簡による。

(注19) 病気がちであったひさが病に勝つようになると、紀一が改名させた名前である。

の私の心に沁み込んで行つた。

つまり、露伴の文章は「実世間的な教訓」として、少年茂吉の心に沁み込んで入っていることがわかる。露伴の處世訓は、父母の元を離れ、親戚とは言つても他人である家族の中で自己を鍛えていかなければならぬ茂吉の心の拠り所になっていたのだ。茂吉は実世間的な露伴の言葉を心の支えとして実社会に立ち向かっていたのだと考えられよう。

こうして露伴の文学に心酔し、『さゝ舟』『天うつ浪』をはじめ、次々と読み破して行った茂吉であるから、初期の歌々にも影響があったのは当然だろう。茂吉は、次に挙げるような初期の歌に対しても「変な空想的な習癖があつた。

(注20) (注1) に同じ。

(注21) 紀一が茂吉を東京に招いて教育したのは、紀一が開業の折、茂吉の祖父に当たる人から援助を受けており、それに対する謝恩の気持ちがあつたとも言わかれている。

(注22) 藤岡敏夫『評伝 斎藤茂吉』(昭和50 桜楓社)。

(注23) 太陽曆で八月二十五日。

(注24) (注18) に同じ。また、同書では養母ひさが、その書生を嫌っていることなども述べられている。

(注25) 『青年茂吉』(平成11年6月 岩波書店)。

(注26) 明治32年5月15日付。

(注27) 明治36年5月4日付 守谷広吉宛書簡。

(注28) 明治36年9月8日付 (鈴木啓蔵『茂吉と上ノ山』所収)。

(注29) 吹田順助「茂吉の思い出」「中学時代の茂吉君、その他」。

(注30) 「短歌私金少第一版序言」(斎藤茂吉全集第九巻) 参照。

(注31) 富太郎宛の書簡(明治33年2月28日付)では、「ますらをは名をし立つべし後の世に聞きつぐ人も語りつぐがねをのこやも空しかるべき後の世に語りつぐべき名を立てづして」等、万葉集の歌を引用しており、万葉歌に対する関心の強さを推し量れる。

(注32) 「文学の師・医学の師」(斎藤茂吉全集第七巻) 参照。

(注33) 次兄富太郎宛書簡(明治33年5月26日付) 参照。

(注34) 「さ夜ふけと夜の更けにける暗黒にびようびようと犬は鳴くにあらずや」(「犬の長鳴」)、「飯の中ゆとろとろと上る炎みてほそき炎口のおどろくところ」(「地獄極楽図」)にある「びようびよう」「炎口」などの語が、露伴の影響によると見られている。

